バッハ・カンタータの日本語演奏

——バッハ受容のもう一つの断面

大村健二

3・11被災地、南相馬市でのバッハ公演

東京バッハ合唱団というアマチュアの音楽団体に一団員として所属し、バッハの合唱曲、主に教会カンタータを歌っている。学生時代の入団から断続的に四五年を経過するが、合唱団そのものは一九六二年の創立で、今年で五三周年を迎えた。創立者大村恵美子は、フランス・ストラズブールでの留学期間に合唱団創設の準備をはじめ、帰国後ただちに活動を開始した。準備とは、バッハ・カンタータの日本語上演を前提とした歌詞の翻訳のことである。バッハを、日本語で？大方のバッハファンには驚かれるが、とにかく半世紀を歌いつづけてきた。

この合唱団が、東日本大震災の巨大津波と原発事故による放射能汚染の二重の被害をこうむった福島県南相馬市において、今夏、第一一二回の定期演奏会を開催し、ソリスト・オーケストラとともに、カンタータ二曲とモテット一曲を上演した。いずれも日本語演奏であったことは言うまでもない。現地のコーラスメンバーも九団体一〇〇名ほどが集い、バッハ音楽の合間に「花は咲く」（復興支援ソング）、「ふるさと」などを合同演奏し、心を結びあうことができたと確信している。三・一一の直後、多くの表現者が何かをせずにはいられない衝動に駆られたと表白していたが、団員一同も同様の心境であった。おりしも、創立五〇周年を記念する大掛かりな企画に着手したばかりのときであり、すぐの身動きはできなかったが、伝手をたよって署名や募金を被災地へ届けたりしながら、現地との関係をきづく幸運にめぐまれ、開催に漕ぎつけたものである。上述の一〇〇名余の方々が中心となって現地での受け皿となり、大ホールを満たすほどの観客を集めてくださった。

その聴衆の方々の中から、二つの反応をとりあげてみたい。一つは、会場でのアンケートに回答してくださったもの。「三・一一の被災地にこのような歌声が響いたことで、救わ

れた思いがします」、「いつも原発のことが頭の隅にあり、気持ちが落ち着かないのですが、こころ静かにゆったりした気持ちになりました」、「本格的なバッハを初めて聴きました。私たちの悲しみ、苦しみは失せることはありません。二度とこのように私たちを苦しめる人災を起こすことがないよう、皆様もお力をお貸し下さい」。この種の感想をいただいて、合唱愛好家冥利につきると満足しつつも、〝人災〟以下の訴えには悄然とならざるを得なかった。東京の電力を生産する施設が、東京周辺にではなく福島県に立地することの不条理を、あらためて思い知ることとなったのである。

もう一つは、公演後のある出演団員に、来聴した友人が語ったという感想。「日本語による上演だったので、語彙の概念や言い回しを聞き取ることができましたが、二一世紀の日本に住み、特別な宗教の背景をもたずに暮している私には、所詮、そのキリスト教的な歌詞の内容は訴えるものがありません。音とその構築だけでバッハは十分楽しめるのではないでしょうか」。また「ソリストがうるさく感じました」とも。

バッハの教会カンタータは、その名のとおり、当時のキリスト教会の礼拝に供することを目的に作曲され、歌詞内容は聖書や教義から離れることはない。キリスト教文化に特別の関心を寄せない、一般の日本人の精神には接点をもちにくいのだろう。が、少なくともこの二〇年、三〇年のあいだに、わが国にも間違いなく定着の兆しがみえる。CD全集も普及し、カンタータ愛好家は確実に増えているのである。こんにち地方の都市名を冠したバッハ合唱団やバッハ・カンタータをレパートリーに加えるコーラス団体は数十の単位にのぼるのではないだろうか。

この慶賀すべき流れのなかで、しかし、上のような感想が聞かれるとは思わない。ドイツ語理解の濃淡によって一概には言えないだろうが（われわれ以外はすべて原語上演）、すなわち「音とその構築だけでバッハは十分楽しめ」ているに違いない。ドイツ語音声の響きをオーケストラの音響のなかに溶け込ませ、歌詞からは解放されて（意味に煩わされずに）、純粋音楽として鑑賞するという稀有な聴き方が、ここ日本では成立しているのかもしれない。バッハがドイツ語（バッハとライプツィヒ市民との母語）で曲を作っていくとき、聴衆が意味から解放されることなどは思ってもみない、むしろ説教者以上に意味を圧しつけてくるほどである。このことが、一八世紀後半のドイツ音楽界でのバッハの不人気につながったという論も少なくないが、上記の感想の「ソリストがうるさく感じました」は、プロの声楽家の発する明瞭な日本語のせいで、意味が分かって煩わしい、という評言だったと解しておく。

バッハを日本語で上演するということ

長年この合唱団の事務局を担当していて、私がこの手の反

応に出会うことは珍しいことではない。そもそも、バッハの日本語演奏というものが一般的ではないので、客観的に論拠を語るには材料が少なすぎるのだが、半世紀に近い実践のなかで積み重ねたものは多い。現代の日本の大多数の鑑賞者にとっての、バッハ宗教曲の歌詞の位置づけ、とくに日本語で演奏する場合のテクストの役割について、思うところを述べてみたい。

このたびの公演の場合、何を、どのように歌ったのか。観客は、何をどのように聴いたのか。録音を聴いていただくに如くはないのだが、片鱗だけでも紙上で想像してみていただきたい。各上演曲の歌い出しを掲げておくと、カンタータ第九二番（BWV 92）「わが心　思い　神にゆだねたり Ich hab in Gottes Herz und Sinn」、カンタータ第八一番（BWV 81）「主イェス眠り　いかにすべきわが望み Jesus schläft, was soll ich hoffen?」、モテット（BWV 227）「イェス　よろこび Jesu, meine Freude」、となる。訳詞は、原則として原詞の各音節に対応させている。冒頭をご存じの方は、旋律に載せて口ずさんでみていただきたい。九二番のドイツ語八音節に対応するのは「わが心　思い」までの八音節、以下は続く旋律に繰り送る。八一番のドイツ語冒頭は Jesus schläft（三音節）をくり返すので、はじめに「主イェス」[shu-ye-su]、つぎに「眠り」と三音節ずつ振り分ける。was soll ich hoffen 以下も同様な処理が施される。モテットはドイツ語六音節にそのまま対応。お分かりのように、やっている作業は、バッハ自身が頻繁に試みる「パロディー」（既存の旋律に、異なる歌詞を当てはめる手法）の原理にほかならない。しかも、音楽そのものが運んでいる思想や情緒のなかに訳詞がおさまるように配置されれば、バッハの意図や絵画表現をオリジナルのままに伝えきることが可能なのである。ここで越えようがないのは、ドイツ語と日本語の、耳にとどく物理的音響の差異であって、音楽という音響芸術の宿命である。要は、われわれ日本語を母語とする歌い手や聞き手が、こころ（精神）のどの深みから歌い、どの深みで聴き取るか、という問題である。〝うた〟という芸術が、こころの叫び、うったえ、という出自をもつのであれば、母語がこころにより近く（原語＝外国語よりも）降りたっていくこともまた、宿命と呼んで差支えなかろう。改革者マルティーン・ルターが、典礼言語や聖歌をラテン語から彼らの母語に翻案することを選んだ思想に通底することがらであり、われわれの日本語演奏の理念もそこにある。

次には、これらを日本人の耳がバッハ音楽として聴いてくださったとして、聞こえてしまうことばの意味にどう向き合うかという問題がある。われわれの取りあげた三曲は、表題を見ただけでも、キリスト教そのものである。原詞で歌われても同じだろうと思われるかもしれないが、ドイツ暮らしの長い方や語学の専門家は別として、辞書をひきつつ、あるい

は対訳を見ながら、分かる単語をたよりにおおよその見当で意味を把握してゆく、われわれ一般の日本語話者の場合、テクストそのものがわれわれの精神に与える衝撃は（外国語だからカッコイイというコンプレックスは論外として）、たぶん、日本語歌詞の直截性・具体性とは比べものにならないのではないだろうか。たとえGott（神）、Jesus（イエス）、Freude（喜び）といったすぐに分かる単語であっても、ことは同様であろう。これは言語学や心理学の研究者の意見をお聞きしたいところである。

二曲のカンタータの素材は、イエスと弟子たちの乗った舟が湖上で激しい嵐に遭って沈みそうになったとき、イエスが風と波を叱ると嵐がおさまったという、新約聖書にある物語である（マタイ福音書八：二三－二七）。日本語テクストには、〈波われをさらいて　奈落に引き寄す〉（BWV 92）とか、〈泡立ちおそう滅びの波　怒り狂う〉（BWV 81）といった、かの日の巨大津波や激震を想起させる句が並んでおり、そのとおりの日本語で歌われるのだが、われわれは敢えてこれらの作品を選んだ。恐怖、絶望を越えたさきの希望と信頼へといたるバッハ・カンタータのメッセージを伝えるためであった。先に掲げたアンケートや、同じく「とてもすばらしかった。泣いてばかりいました」、「心が洗われる時を過ごせました」などの回答から、われわれの願いは南相馬の人びとに伝わったと信じている。日本語演奏の成果だったと思いたい。ドイツ語原詞での上演であればまた別の感想が聞かれたのかも知れない。

「音とその構築だけでバッハは十分楽しめる」は、大いなる真実である。その前に置かれた「所詮、そのキリスト教的な歌詞の内容は訴えるものがありません」に、私は大いに興味を惹かれたのであった。これに答えるのは、伝道師や牧師の務めであって、一アマチュア合唱団員たる筆者のあずかり知らぬ事柄ではあるが、こころに共感として届くにせよ、ザラっとした違和感として届くにせよ、いずれの聴き手も、バッハの祖国の現代人がバッハをドイツ語で聴くときに感じるのと同じ位相で聴いてくださったということではないだろうか。バッハ受容の、もう一つの断面である。■

おおむら・けんじ▼東京バッハ合唱団員。

■大村恵美子・大村健二［編著］
バッハ　コラール・ハンドブック
好評発売中
バッハの楽曲で使用されているコラールをコンパクトに集成した便利な楽譜・歌詞集。大作曲家の源泉とも言うべき会衆歌の宝庫。バッハ・ファン、合唱団必携の書。　本体二八〇〇円

●題字＝顔真卿
●DTP＝澤泰偉
平成二七年十月二五日発行
春秋
発行人＝澤畑吉和　発行所＝株式会社 春秋社　〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-6
電話 03-3255-9611（営業）3255-9614（編集）　FAX 3253-1384（営業）3255-9370（編集）
振替 00180-6-24861　印刷＝萩原印刷株式会社　定価 九〇円（本体八三円）一年分九〇〇円（税・送料込）